

猪名川河川レンジャーより

猪名川の歴史

地球が誕生して約45億年。陸地に雨が降れば川が生まれましたが、古い川の歴史は、研究者にまかせることとします。

(興味ある人は、「特定非営利活動法人野生生物を調査研究する会」発行の「生きてる猪名川(増補版)」を参照してください。地質学などもあり専門的過ぎない読みやすい刊行物です。)

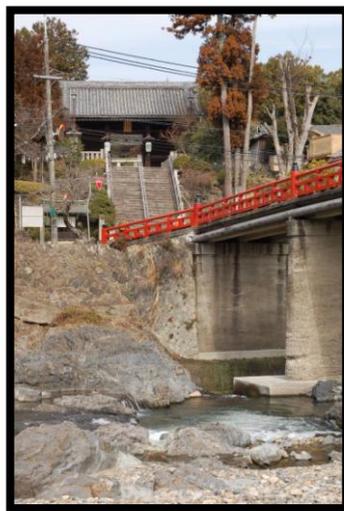
以下、主に「猪名川」について記述しますが、一つだけ知っておいて欲しいことがあります。猪名川は、流域面積430km²、主流延長43kmで、「淀川」水系に属します。これは、大阪湾の海底で確認される河川の痕跡から確認されています。

さて、人と猪名川の関わりはいつ頃から始まったかは確定出来ませんが、日本における最古の遺跡・遺構が約5〜3万年前頃と言われているので、それよりは古くはありません。

加茂遺跡(川西市)は2万5千〜1万5千年前から古墳時代に形成されたと考えられています。弥生時代中期には加茂遺跡を中心に下加茂・栄根・小戸などの遺跡郡が栄えたと考えられています。

田能遺跡や最近見つかった広根遺跡(猪名川町)も人口が流域に展開する過程で生じたものと考えられます。考古時代は遺跡

や遺構からの実証で、歴史記述が多く残るのは、やはり平安中期の撰津(多田)源氏(全国の清和源氏の元祖と言え)以降です。



多田神社と猪名川

まず、川の利用の一つとして、運送が挙げられます。猪名川本流の上流部に「杉生」や「スギオ」と言う地名があります。また、猪名川町立ふるさと館がある地名は「楊津」や「やないず・ようしん」。楊は柔らかなめの木、津は港の意味。で、これは、杉生で伐採した木を一本づつ流し、楊津で筏に組み池田(平安期の物資の集積地)や尼崎(浜通辺りや神崎)まで流したようです。

能勢町・豊能町でも大路次川や余野川への材木の筏流しがありました。地名から各地の歴史を考証をしてみてもいかがでしょう。

地名と言え

ば、池田・川

西に絹延町

(橋)や呉服

(クレハ)町

(橋)があり

ます。絹延は、

織物の染色を

した場所ので、

水のきれいな

冬の期間に染

色した布を晒し、

昭和40年の初めまで

続いていましたが、

和服の衰退で西陣に

押されその風景は

無くなりました。

呉服は、反

物を紡いだ、ある

いは流域の絹や

木綿の集積地(流域の

自作農家には、

養蚕や綿花栽培

のための用具が

あり、猪名川町

立ふるさと館に

展示。でした。

地名と直接関係

はありませんが、

日本最初の「清酒」

が誕生したのも、

濁り酒が流域で

多く生産されており、



友禪の流し洗い【出典:猪名川今むかし】

伏見や東神戸の灘五郷の生産が盛んで、江戸時代の樽回船に続くことになり、「下らない」と言う語源の例外産物です。)

都市部では、住居表示のため消えて無くなりましたが、郡部では、大字の後に〇〇垣内や〇〇町などがあり、ここでは、手工業や日用品の販売などが行われていたと思われれます。お住みの地域の地名の言われを調べてみるのも興味深いと思いますが、「瀬」「洲」「島」「鳴」「沢」など災害

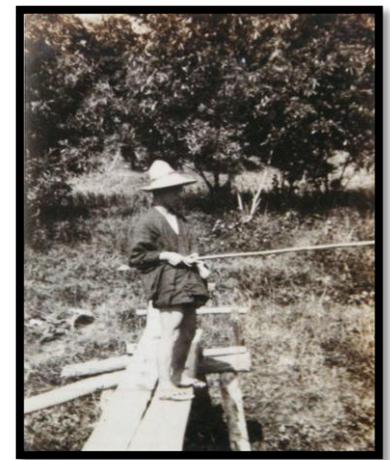
起因の地名も少なくないようです。また、「星月夜の織姫（池田市）」、「四斗だるの用水（尼崎市）」など各地に残る「民話」「伝承」などを調べるのも興味深いでしょう。（市町史に掲載。）

さて、歴史記述に残るのは、中央政権などに依るものがほとんどですので、想像をたくましくして、前述のような猪名川流域の人口展開から一般庶民の暮らし（主に食）に焦点をあてて考えてみましょう。

農業用の灌漑用水としての利用はもちろんです。農地の開拓が流域の上流部まで進んでいけば、当然「蛋白」源としての食料が必要となってきます。もちろん、家禽（鶏や兎など）の飼育や猪・鹿・兎の狩猟もあつたでしょう。今日のように化学肥料も無い時代、農地の生産力は低く、十分な家禽は飼えなかつたでしょうし、野山の獣も日本狼が生息していたので、狩猟できる機会は希だつたと思われれます。

さらに、海産の魚介類は運搬手段の貧弱（漁労技術や製塩・加工も）なことにより内陸部で入手することは困難だつたはずで、従つて、蛋白源は、川の恵みに頼らなければならなかつたと言えます。

戦後のこともあつて、筆者も春から秋にかけては、鯉・鮒・鮎などの川魚や鰻、シジミ、ヌマエビを随分捕つたものです。父や叔父の時代には、サクラマス的一种やモクズガニも捕つたと聞いています。（沢ガニは、鰻や猪の餌で、猪名川流域の殆どの地域では食料としなかつたようです。）



木津の魚とり
〔出典：猪名川今むかし〕

日本料理のルーツは、旬の野草や川の幸から生み出されたのかも知れません。猪名川流域に人が住み着く以前の自然は、楠や檜など（杉・檜の群落も）常緑照葉樹が主な植生でした。

松は、弥生時代に導入された外来種ですが、2〜300年で全国に広まりました。クヌギやコナラは、主に日本海側の植生で、生産力（燃料や肥料（腐植土）として）が高いため縄文中期以降人工的に導入された樹種で、現在の里山の姿を形成した元となりました。特に、7世紀に開発された多田銀銅山の背後地として流域上流部で炭や薪の材料の需要が高まつたことから、3〜40年前の若葉や紅葉の美しい里山が形成されました。

残念ながら、近年、松枯れ、檜や椿さらには竹などの勢力拡大により太古の常緑照葉樹森に復古しつつあるようです。

（猪名川河川レンジャー 奥村眞事）

猪名川河川レンジャー活動報告

猪名川流域意見交換会を開催しました！

猪名川河川レンジャーの主催により、7回目となる『猪名川流域意見交換会』を開催しました。今回の意見交換会は、地域ごとの課題などを話し合うことを目的に、“下流域”と“上中流域”に分けての開催を試みました。

両会場合わせて、20名以上(10団体以上)の方に参加頂きました！



下流域会場

- 開催日：平成26年2月9日（日）
- 場 所：園田公民館（尼崎市）

上中流域会場

- 開催日：平成26年2月22日（土）
- 場 所：みつなかホール（川西市）



意見交換会には、猪名川流域で活動を展開するNPOなどの活動団体に加え、『猪名川のい〜な！大募集』の作品応募者も参加し、河川レンジャーや協力員とともに、猪名川流域の魅力や地域の課題などについて活発な意見交換を行いました。意見交換では、様々な活動を展開していく上では情報発信や情報交換等が非常に重要であり、そのためにもこの意見交換会を継続していくことなどが確認されました。

『猪名川のい〜な！大募集』の今後の展開についても、たくさんの意見を頂いたので、第3弾に活かしていきたいと思ひます！